子育て支援プログラム「あそびの森」実践報告〈1〉
－平成16年度10月～3月実施プログラム－

幼児教育専攻　若杉　雅夫　杉山喜美恵　篠田　美里　松尾　良克
長谷部和子　伊藤　功子　窪田千恵子　瀬地山葉矢

はじめに

今日、少子化現象に顕著に現れているように、子どもを取り巻く環境は劇的に変化している。

その中でも特に、核家族化、人間関係の希薄さ、地域コミュニティの鈍化等により、孤立した環境での子育てに起因する問題が大きく出現してきた。

本学の幼児教育専攻では、「地域との共生」をテーマに、次世代支援の中核を成している「子育て支援」と保育者養成校としての「学生育成」を理念とした子育て支援プログラム「あそびの森」を立ち上げた。これは、本学園の「今日の教育ニーズに対応した教育改革プログラム」の実施プロジェクトの一つとして承認され、全学的支援の基に平成16年10月より実施運営しているものである。

立ち上げ初年度は、近隣の幼稚園、保育所に案内チラシを500枚配布、でスタートしたがすぐに予約が埋まってしまった。その後、お願いしてあった市の広報に掲載された頃にはおことわりをしなくてはならない状態でありニーズの高さに驚いた。平成16年度全8プログラムは延べ409名の参加者に遊びを提供することができた。

「あそびの森」のコンセプト、実施プロセス、特性、組織性、有効性、今後の展望については本紀要の「子育て支援プログラム・子育ち親育ち・学生の心の育成」の項に述べた。よって本文は、平成16年度全8プログラムの実施報告のうち、活動報告のみとした。

活動報告

プログラムNo.①
10月30日　新聞やぶり
担当及び執筆　若杉　雅夫

プログラムNo.②
11月13日　スタンプシアター
担当及び執筆　若杉　雅夫

プログラムNo.③
12月11日　クリスマス会
担当及び執筆　杉山喜美恵

プログラムNo.④
1月22日　森の音楽家
担当及び執筆　篠田　美里

プログラムNo.⑤
2月12日　親子で作るペーパークラフト
担当及び執筆　松尾　良克

プログラムNo.⑥
2月26日　紙芝居・うちわでサーキット
担当及び執筆　長谷部和子　伊藤　功子

プログラムNo.⑦
3月　2日　幼稚園交流会
担当　若杉　雅夫・篠田　美里（執筆）
三羽佐和子・伊藤　功子

プログラムNo.⑧
3月12日　音楽絵本
担当及び執筆　窪田千恵子　長谷部和子

活動にかかわる準備および環境構成
執筆　瀬地山葉矢

プログラムNo.①
活動名
「新聞やぶり（オープニングプログラム）」
実施日
平成16年10月30日(土)
10：30am～11：30am
ねらい
・思いっきり気持ちを解放する。
・あそびの過程で周りの人やその場に慣れ親

しむ。

・「あそびの森」のオープニングプログラムに参加された親子の気持ちを和らげ、ともに遊ぶ楽しさを体感する。

・破ったりちぎったり引っぱったりすることで、指先などの身体機能をも高める。

担 当 者　若杉雅夫

参加人数

62名　　参加家族24組

(保護者26名／子ども36名)

手伝った人数および担当

教員：5名　学生：50名

担当内訳／案内・受付・託児・あそびの支援

※学生の人数は、準備段階で贈り物の手作りおもちゃを製作した学生の数も含む。

内　　容

活動の前に、学生が手遊びで子どもの気持ちを惹きつけ、その後新聞破りの遊び方について、これも学生による実演で簡単に説明した。

新聞はひとり朝刊一部配布し、活動が活発になるように状況に応じて補充することとした。あそびの素材となる新聞紙を足していくことは、活動を活性化することとともに、破られた新聞紙の切れ端の量が多くなることで、柔らかく包み込まれるような浮遊感を得ることができ、そのことが一層活発な活動を誘引する。あそびの支援にも学生が一家族につきひとり当たり、円滑に新聞破りが展開するようにした。参加した親子は、破る・ちぎる・くしゃくしゃにする・ばら撒くなどして十分に気持ちを発散した。

最後はビニール袋に新聞紙の切れ端を詰めてボールを作り、新聞破りから自然に片付けに繋がるようにした。作ったボールで、サッカーやドッジボールをして遊びを締めくくった。

総括・反省および考察

保護者も子どもと一緒に思いっきり気持ちを発散させ、日頃のストレスを解消されたようで、初回としては、よい結果であったと考える。学生のあそびの支援は、言葉掛けなどやや積極性に欠ける点が見受けられたので、今後の課題として考えていかねばならない。今回の新聞破りは、機能的快楽を楽しんだが、次回はこれを発展させ想像的遊戯につながるプログラム作成する。

手遊び

破って遊ぶ

プログラム№②

活 動 名　「スタンプシアター」

実 施 日　平成16年11月13日(土)

10：00am～12：00pm

ね ら い

・生活の中にある廃材が造形表現の素材となることを知る。

・いつも見慣れている形をスタンピングすることで違った側面を見出し、生活にあるさまざまなものに対する興味や関心を高め感受性を育てる。

・何度もいろいろな色でスタンピングすることで、色や形の面白さを自然に楽しむ。

・手形遊びで家族の絆を再確認する。

・スタンピングの模様を利用して服・帽子・ベルト・ネクタイなどを作り、柔軟性や工

夫する力を培う。

担 当 者　若杉雅夫

参加人数

54名　参加家族21組

（保護者25名／子ども29名）

手伝った人数および担当者

教員：4名　学生：20名

担当内訳／案内・受付・託児・あそびの支援

内　容

活動の前に、学生が手遊びで子どもの気持ちを惹きつけた。その後スタンピングの遊び方について簡単に説明し、インク皿（スチレントレーに水彩絵の具）・カタ押しの素材・全紙大の画用紙を各家族に一セット配り活動に入った。参加者は、丸い形や四角・三角・花模様などさまざまなカタを繰り返しいろいろな色でスタンピングを楽しんだ。写し出されたカタチが織り成す偶然のハーモニーに引き込まれるように親も子もカタ押しに熱中していた。

十分にカタ押し遊びを楽しんだ後、一旦その紙を片付け（乾燥の為）、代わりに全紙大の黒のケントラシャ紙を配付した。次は同じスタンピング遊びだが、家族の手形遊びを楽しんだ。大きなお父さんの手、優しいお母さんの手、小さくてかわいい子どもの手、たくさんの家族の手が握手をしているように繋がって、大きな画面を美しく飾った。

最後は、乾燥させた最初のスタンプ遊びの紙を利用して、カラフル模様の服や帽子、お父さんのネクタイや空飛ぶマントなどを創って楽しみ、遊びを締めくくった。

総括・反省および考察

今回の遊びは、お父さんもお母さんも子どもと一緒に虹色の手になってスタンピングのカタ遊びを楽しんだ。また、夢中になって遊ぶ中でお互いに素直に心を通わせることができ、家族の一体感も増したと考える。

材料用具の配付、スタンプの仕方など前回より積極的に学生が家族と関わった。

今回は問題なかったが、子どもの年齢（0歳～5歳）にかなり幅があるので遊びの内容の工夫や、プログラムによっては、子どもの年齢を考慮した参加家族の選出が必要である。

手形あそび

スタンプ模様の服・帽子

プログラム№③

活 動 名　「クリスマス会」

実 施 日　平成16年12月11日(土)

10：00am～12：00pm

ね ら い

・クリスマスという行事を通して親子で楽しむ。また、多くの人と一つの行事を楽しむことのうれしさを味わい、その気持ちを共有する。

＜学生側＞

異年齢の子どもたちが楽しめる内容を企画し、安全に配慮して全員が楽しめるよう、進行する。

担 当 者

杉山ゼミ（指導教員：杉山　喜美恵）

参加人数

51名　参加家族20組

（保護者20名／子ども31名）

手伝った人数および担当

教員：4名　学生：38名

担当内訳

教員：学生補助／学生：受付、司会進行、託児（おねむさんの部屋）、駐車場整理

内　　容

1．オープニング
（音楽ペープサート「小さな世界」）

2．みんなでゲームをしよう！
（クリスマスオセロ・メリークリスマス）

3．手遊びと絵本
（手遊び「ひげじいさん
ークリスマスバージョン」
絵本『まどからおくりもの』五味太郎作）

4．ほんの気持ち
サンタクロース（学生が扮装）が登場し、学生が作成したクリスマスカードを子どもに一人ずつ手渡す。

5．歌をうたいましょう
（全員合唱「あわてんぼうの
サンタクロース」）

総括・反省および考察

今回の活動に関しては、学生が企画段階からかかわり、当日の進行も学生中心となるよう配慮した。未就学児というかなり年齢幅の広い子どもたちとその保護者の両方が共に「クリスマス」という行事を楽しめるような内容を企画するというのは学生たちにとってかなり難しかったようである。

実習では、比較的同一年齢での活動を計画することが多く、今回のように異年齢でしかも親子で参加するというプログラムは学生にとって子育て支援というものを実際に体験する有意義な機会となった。

アンケートより、参加者はおおむね楽しんでいただけたようだが、年齢によっては、ゲームが難しかったという感想もあり、今度、企画段階での課題である。

ゲームの様子

絵本の読み聞かせ

プログラム№④

活 動 名　「森の音楽家」

実 施 日

平成17年1月22日(土)
10：00am～12：00pm

参加人数

26組　63名（子ども37名大人26名）
風邪の季節につき5組の欠席有り

担 当 者　篠田ゼミ生（指導　篠田美里）

手伝った人数

教員　4名　　学生　34名
その他　バイオリン・マリンバ（学生）奏者

ね ら い

・童謡「山の音楽家」を基に、子ども自身が動物に変身し、森での演奏会ごっこに参加することで、音楽会遊びのイメージを味わう。
・廃材で音の出る楽器を作ることを楽しみ各家庭での親子あそびに繋ぐきっかけとする。
・本物の楽器の音色に親しみ楽器への興味を培う。

内　　容

・森の動物に変身しよう
・廃材で楽器を作り演奏会ごっこをしよう
・本物のバイオリンとマリンバの演奏を聞こう

ぷろぐらむ

☆手遊び（とんとんとんとんシリーズ）
☆山の音楽家ごっこ
○動物に変身（りす・たぬき・ふくろう・うさぎのお面を付ける）
○たぬき・ふくろう・うさぎ、各々手作り楽器を演奏しながら山の音楽家を踊る
○ふくろうのもっていた笛を作る
○うさぎのもっていたマラカスとおみやげのかえる笛を配る
○それぞれの手作り楽器を十分音を鳴らして楽しむ
○お面をかぶり、好きな楽器を持って音楽会ごっこをする
○たぬきのマリンバとりすのバイオリンによる本物の楽器を使った演奏を聴く
☆手遊び（こんこんきつね）
☆さようなら

アンケート　聞き取り、学生が記入

考　　察

今回のプログラムは与えられたテーマ（山の音楽会）を学生が中心となって企画・運営したものである。ふくろう笛のパーツは美術の若杉ゼミ生が、動物の名札とお土産のかえる笛は当時の１年１組の有志メンバーが製作した。

企画段階や運営段階の話し合いでは、実習体験を基に幼児理解をふまえた活発な意見交換がなされた。この活動のコンセプトである学生の能動的学習の場となっていることを実感した。一方で、実習を体験していない１年生には理解し辛い点もあったが、この体験は、次年度に繋がると思った。

当日は出席率が高く、人数が多く、乾燥の季節に暖房の関係も加わり、かなり室内が乾燥していた。今後、環境面での課題としたい。今回のプログラムはアンケートを提出された（21枚）かぎりでは楽しんでいただけたようであった。ここで提示した遊びや、手作り楽器は自宅での遊びに繋がることを期待したい。マリンバとバイオリンの演奏はどの年齢の子どももとても興味を示した。本物の持つ力を学生が再認識するチャンスにもなった。

アンケート回答項目にあった今後希望する活動は、造形遊び、リズム遊びが多かった（21回答中17）この結果を今後に繋げたい。

手遊び

プログラム№⑤

活 動 名　「親子で作るペーパークラフト」

実 施 日

平成17年2月12日(土)
10：30am～11：30am

ね ら い

親とこどもが一緒になって一つの物を作る事により、親子のコミュニケーションをはかるとともにできあがった作品を使い遊び楽しむ。

担 当 者　松尾良克

参加人数

49名　参加家族　12組
（保護者　17名・子ども　32名）

手伝った人数及び担当

教員　4名　学生　30名
案内・受付・託児・クラフト作成支援

内　　容

事前に、インターネットサイトで公開されている無料の、ペーパークラフト用紙を印刷し、参加家族の子どもの人数に応じた数の作成用紙を袋詰めして用意しておき、受付時に参加者に渡した。

活動開始時に、学生による手遊びで子どもの気持ちを引きつけた後、ペーパークラフトの作り方、遊び方を説明し作成作業に入った。

作成には、切る・折る・貼り付けるの作業があり、親も子どもも、夢中で作成作業に没頭していた。二人以上の子どもと参加された家族には、学生がそれぞれの子どもに付き、一緒になってペーパークラフトを作り、家族のサポートを行っていた。

参加者の中には子どもより夢中で作成している保護者の方もおられた。また、子どもも自分で切ったり、貼ったりして色々な作品を作れることに喜びを感じていたようだった。

作品には、グライダー・紙（竹）とんぼ・指人形・お面・吹きごま等があり作成後、それぞれ親子で飛ばしたり、回したりして楽しんでいた。

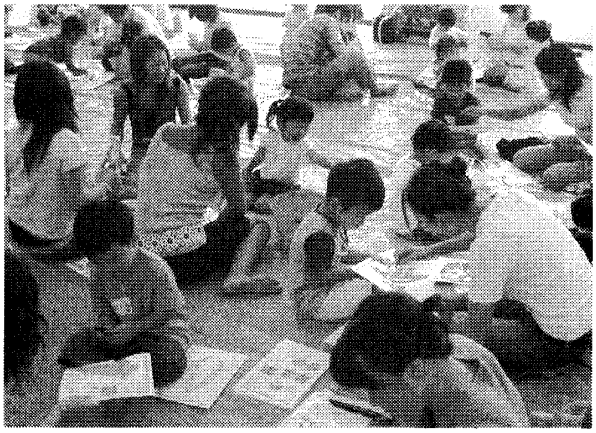
総括・反省及び考察

初回のことでもあり、子どもがどの程度ペーパークラフトに目を向けてくれるか不安であったが、自分ではさみを使い、切り、貼り付けることにより作品ができあがる事を楽しんでいた。

作成する作品の印刷をするにあたり、簡単に出来る物、作った後で楽しめる物等を考慮すると、選択に難しさがあった。

また、子どもの切り損じも多々あり、予備の印刷物の不足があったので次回実施する場合には、この点を考慮して作らなければならないだろう。

作成風景１



作成風景２

プログラム№⑥

活 動 名　「紙芝居・うちわでサーキット」

実 施 日

平成17年2月26日(土)

10：00am ～ 12：00pm

ね ら い

紙芝居の読み聞かせで子どもの想像力をたかめ、目の前で直接読んでもらう楽しさを知る。また、受身の遊びだけでなく動、すなわち体全体を使って親子で一緒に楽しみながら腹筋やその他の体の部位を強化できる遊びも経験する。これら正反対の体験をすることで子どもが飽きることもなく集中力を高めながら親子で触れ合う時間を過ごすことができる。

担 当 者　長谷部和子　伊藤功子

参加人数

親子（18組）親：18名、子ども：25名

手伝った人数および担当

教員：３名　学生：２年12名

当日のプログラム

9：30～　受付
10：25～　挨拶
10：30～　手遊び・紙芝居（ピノキオ）
11：00～　親子体操(幼児向け準備体操・マンボでぞうさん)
11：15～　うちわでサーキット
11：50～　終わりの挨拶
11：50～　後片付け
12：20　修了

総括反省及び考察

担当者が考える以上にお母さんが活躍して

いる姿が見受けられた。また、父親ならではの活発な動きの親子も見られたのが学生にとっても良い学習の場となった。参加学生が卒業前の全ての講義を修了した学生で、親や子との触れ合いの中に非常に上手く入っていたのが印象的であった。反省点としてはサーキットで使ったダンボール箱がもう少し頑丈であるとより楽しめたであろうと思われたことである。

学生に手遊び・紙芝居読みなど全て責任を持って親子の前で上演するよう指導したが、2年間での成長を発揮できる良い機会となった。

紙芝居「ピノキオ」

うちわでサーキット

プログラム№⑦

活 動 名　「幼稚園交流会」

実 施 日

平成17年3月2日(水)

10：00am ～ 14：00pm

担 当 者　若杉・篠田・三羽・伊藤

参加人数　園児37名　引率者5名

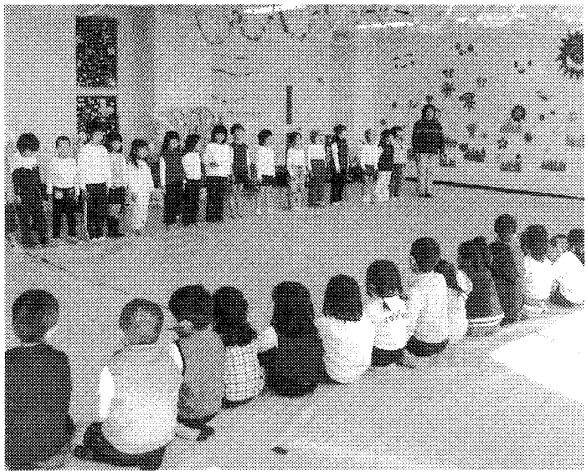
内　容

・新聞を使って輪くぐりゲーム
・お運びゲーム
・新聞破りどこまで半分こできるかな？
・新聞ボール作り　・手つなぎサッカー
・わらべうた遊び　・墨絵(かぶとにんじん)

考　察

このプログラムは近隣の幼稚園の申し出によって企画されたプログラムである。

近年少子化により同学年一クラスの園が増えている。今回、小学校入学にむけて人間関係の広がりをねらいに、近隣の幼稚園が交流の場として申しこまれた。思いがけない提案であったが、新たな利用方法を教えられた。こちらの用意した遊びと、それぞれの園の準備されたあそびで楽しい時を過ごしてくれた。これをきっかけに今年度は幼稚園などの団体対象の遊びの日も2回ほど設けた。



交流会

墨絵（にんじん・かぶ）

プログラム№⑧

活動名　「音楽絵本」

実施日

平成17年3月12日(土)

10：00am ～ 12：00pm

ねらい

親子で大型絵本(3匹のこぶた)を題材に、歌ったり、「マヨブタ」を作り、英語にも親しむ。

担当者　窪田　千恵子　長谷部和子

参加人数

親子　20組　親27名

子ども30名　学生　25名

内容

長谷部ゼミ生の手作りによる大型絵本(54×80)「三匹の子ブタ」に窪田ゼミ生が音楽・効果音の挿入を受け持った。音楽はBGMとして挿入し、テレビアニメの雰囲気をかもし出すように配慮した。使用楽器は、キーボード、鍵盤ハーモニカ、リコーダー、擬音用和太鼓など身近な簡易楽器を用いた。キーボードは主旋律以外はなるべく楽器音で行うようにした。他の擬音は手作りとして、ダンボール箱を使ってノコギリの音。紙コップとたこ糸で作ったブタの声やマヨネーズの入れ物を利用して作ったブタの鳴き声を使った。(名前ーマヨブタ)

お話の終了後、手作り音「マヨブタ」作りに進む。マヨブタ材料ーマヨネーズの空容器、ストロー、セロフィン紙、ビニールテープを使用。ストローの先にセロフィン紙のフィルターをつけ、耳、シッポなどの細かい作業で時間のかかるものは、事前にゼミで準備しておいた。製作後には、主人公に関連した「こぶたぬきつねこ」を「マヨブタ」も入れて、親子で鳴らして楽しんだ。自由遊びの一つとして、糸でんわを5組ほど用意した。最後に親子の触れ合いを深めるために「Little Piggy」というChantを行った。

考察

「あそびの森」の参加者に関しては、年令が一定していないので、発達段階にそった遊びはできないが、「三匹の子ブタ」のお話中に音が入ると、絵本の方に向いていた顔が即、音に反応し楽器の方を向く。まだ、話の内容が理解できず、興味のない1歳位の子どもが、音に反応を示し、かけ寄ってきて楽器をさわりたがった。

マヨブタ製作は、親が子どものために、または自身が童心にかえって作っている様子で、ほほえましかった。マヨブタ製作後に鳴らして楽しんでいる保護者にマヨブタ遊びの一方法として、親子で1つずつ持ち、リズムをつけて、呼び掛け、返答という「音会話」の方法を教えたら、鳴らすだけではない意外な応用的使い方にとても驚いていた。また、製作中に一人の母親から「このフィルター紙(セロフィン紙)はどこで買ったらいいですか」と問われ、「身近にあるクッキーの包み紙でもよい」とアドバイスしながらも、改めて保護者が身近な物で工夫する力を支援しなければならない年代の人達であることを実感し、また担当者自身が親自身の世代環境を知らねばならないことも感じた。帰りに、「マヨブタ、とてもよかったです。また色々教えて下さい」との言葉も頂いた。しかし、担当者としては材料を多く揃えるのに苦労した。

年長の男の子がキーボードをとても上手に弾き、得意気であった。感性教育とはまず「何かを行う。与える以前に身近なところから、何かをキャッチする力そのものが感性を育てる一歩であること。そして発達成長とともに、「行いたい意欲」が芽ばえ、向上心となり、「力」になっていくのだと感じた。

活動にかかわる準備および環境構成

プログラム

前節で報告した各回の遊びの内容およびあそびの森全体のプログラムは、その年の前期に専攻スタッフそれぞれが遊びの案を持ち寄り、検討を重ねたうえで決定したものである。そして後期の始まりと同時に、一般に向けてのあそびの森の活動を開始した。

広報活動

まずはあそびの森の広報活動（主に案内の配布）および参加受付の作業からスタートした。案内の配布先は、幼稚園・保育所を中心とする近隣の公的機関であった。

受　付

参加受付は、初年度は電話とファックスにより行い、電話については月曜から金曜にかけての午前・午後合わせて十の時間枠に、専攻スタッフが分担して研究室等に待機し、参加申し込みや問い合わせの電話に応じるかたちで対応した。

参加決定

参加申し込みは、電話とファックスとを合わせて先着順での受付としたが、受付開始後しばらくして、地元の新聞や広報誌にあそびの森の記事を掲載していただいたこともあり、こちらの予想を上回る申し込み数となった。当初予定していた各回25組の定員を急遽増やすなどして対応にあたったが、それでも一部の方々には参加をお断りせざるを得ない事態となった。参加が決定したご家族には、後日あらためてハガキで日程の案内を送付した。

あそびの森の活動にむけて

こうしていよいよあそびの森の本格的な活動へと向かうことになるが、先に紹介した各遊びにおいて、参加する親子が遊びの内容を理解し、より楽しく、安全に過ごすことができるよう、それぞれの遊びの担当教員は本番の実施に先立って、学生たちと遊びに必要な用具を揃え、当日の遊びの進め方や支援について確認するなどの準備を行ってきた。当日の遊びの支援はもとより、このような準備も含めた活動の全過程を通じて学生の育成をはかること、このことも子育て支援と並ぶあそびの森のもう一つのねらいである。もちろんそれは教員側にとっても、日頃の教育の成果を直接的に観察することのできる現場ということになる。学生にとって学外での実習は、もちろん実習先の職員の方々からのご指導など多くの関わりがあるとはいえ、基本的には、不慣れな環境で孤軍奮闘しながら各自の課題に取り組んでいく場となる。これに対しあそびの森は、通い慣れた校舎で、学生生活を共にする友人や教員たちに囲まれながらの実践活動であり、その分多少の余裕をもって、意外に、普段あまり目にすることのない友人や教員たちと親子との実際の関わりをも目の当たりにしながら、自分自身の保育における行動や関わりを振り返り、再構成していく機会になっているのではないだろうか。

環境の構成

次に環境の構成についてであるが、環境の大きな構成要素の一つであるわれわれスタッフと親子との関わり合いについては、先述した各遊びの解説の中で取り上げているため、ここでは主に、全ての回に共通する物理的な環境の構成についてふれることにしたい。当日は遊びの支援のほかにも、①案内係（駐車場、7号館1階玄関、同館1階エレベータ前、あそびの森の会場のある同館5階エレベータ前、あそびの森の会場入り口付近、これらの場所での来場者の誘導・案内）、②受付係（名簿による参加者の確認・出席カード（注1）および名札（注2）シールの配布など）、③「おねむさんの部屋」（入眠した児や授乳のための部屋）係を設け、メインの遊び担当以外の専攻スタッフおよび学生がこれらの係の仕事を務めた。またあそびの森の会場である保育実習室には、ロフトやすべり台が設置されていることから、子どもたちがこれらの遊具で存分に、かつ危険なく遊ぶことのできるよう遊具の周囲には重点的にスタッフを配置し、子どもたちの動きに目が行き届くよう配慮した。また校舎の5階という場所柄、とりわけ保育実習室の窓の開閉や子どもだけの室内外への出入りにも十分な注意を払った。こうした役割もまた、参加者の安全を守りつつ親子の関わりや遊びの進行を支えていく重要な環境の構成の一つであると考えている。

注1）篠田ゼミ生の手作り

注2）1年1組有志により動物名札を手作りした。仲間作りに役立つよう、一家族同一動物とし、親子を明確にした。

室内装飾・壁面構成

室内装飾は各ゼミがそれぞれの想いで担当した。安全面を中心に長谷部ゼミが、牛乳パックを使って「おねむさんのへや」と「あそびの森」の柱や壁面を装飾、「あそびの森」室内全体の壁

面装飾は若杉ゼミが大作を仕上げた。また、もう一方の壁面は高畠ゼミが作品を展示した。こうして上記の実践報告の写真の背景にある楽しい壁面が出来上がった。学生にとっても、実際の保育室以上の大きな壁面に作品を作る機会が与えられ、貴重な体験となった。

壁面装飾（若杉ゼミ生）

総括・考察

共通テーマ

「あそびの森」の活動内容を設定する場合の共通テーマは「親子で共に様々な遊びを体験する機会と場を提供し、その中で子どもが仲間や大人と共に、実際の素材と関わりながら、やる気や達成感や人との交わりを現実のものとして体験し、子どもの主体性、考える力を培い、生きる力を養うこと」である。各回の担当者はその事を核に、ここに参加された親子が、共に楽しい時を過ごされ、一緒に考える時間を過ごしていただけるようにと願ってプログラムを作成してきた。

様々な遊びを提供する

「あそびの森」は未就学児を対象としているが、実際の応募者は予測通り未就園児が多い。プログラム作成に当たってはこの事を十分考慮し、内容を設定した。また、ここでのあそびが、後日、自宅でくりかえされ、さらに新たな遊びが展開される内容とした。つまり、鑑賞型プログラムではなく、体験活動を主とするプログラム内容にしたのである。また、出来るだけ手作りを心がけ、そのために必要な材料を集め、パーツは学生が作成した。

学生の学び

学生の学びは実に多くのものがあった。学生の実習先では保育所等同年齢児の集団のクラスに分けられている。そして、保護者は誰一人いない空間であるため、子どもも保育者や実習生を頼りにしている。しかし、この「あそびの森」は保護者と一緒の参加である。保育所とは違った姿を見ることが出来る。そのことによって、子どもの発達年齢に応じた姿や、保護者と共に安心して活動できる姿、また、保育所での頑張る姿を理解することとなる。さらに、乳児と兄弟、姉妹を連れて参加する場合に必要な荷物の多さや、兄弟、姉妹間での母親の奪い合いの場面を目の当たりにし、母親への感動と自分に照らし合わせた感謝の気持ち、さらに、母になったときの自覚も芽生えてくる。この、以前の日本社会にあった異年齢が共に暮らす大家族から学んでいたものを学生達はここに参加された親子から学ばせていただいているのである。

今後にむけて

本学での「あそびの森」は多くの学生の手と参加があって提供出来るものである。この部分が地域の子育てサークルと異なる活動の特徴といえよう。この活動を通して「子育ち・親育ち・学生の共生」を実感している。

今後は新たな取り組みとして、臨床心理士を中心とした子育て懇話会を設け、子育て相談のきっかけを作っていくこととなった。

ここで芽生えた子育て仲間が子どもの成長とともに地域サークルへと発展し地域での子育て支援の向上に繋がることを願い、今後も様々な遊びを多くの親子に提供出来るよう取り組んでいきたい。

－ 児童教育学科　幼児教育専攻 －